専門職としての幼児教育者

内田安久

幼稚園の先生は、専門家であり、スペシアリストである。だから先生方は、その自覚のもとに十分な責任感と誇りとをもって、その職にあたるものでなければならない。

こういうと、なにを今さらそんなわかりきった月並みのことを……と思う人が多いかもしれぬ。けれども、そのわかりすぎていることをことあらためて強調しなければならないところに、現時的のなにかがあるのではあるまいか。

そう感じさせる何かの中の一つは、世間の人々が一般にいだいている幼稚園教育者にたいするイメージであろう。幼稚園の仕事はらくなものだ。相手はたわいもない幼児、むずかしい理屈などはほとんどいらぬ。歌ったり踊ったり絵をかいたりして、一日中を子どもといっしょに遊んですごせばことは足りる。幼児の世話はちょっと厄介だろうが、その程度のことは母親なら誰でもが家庭内で、主婦としてのつとめのかたわら結構処理していることではないか。しかも先生方はそれに専念してさえいればよいのだ。そのくらいのことなら、誰にだってできよう。だから自分もひとつ、幼稚園の先生にでもなってみようか、というので単純に幼稚園教諭を志望するひとも少なくないのではあるまいか。

はたして幼稚園保育の仕事が、そのように簡単でらくなものかどうかは、一日でも体験すればすぐわかることだから、ここで触れる必要はあるまい。だが、もしも在職の先生までが、一般の人と同じような気持で幼児に直面し、保育の仕事にたずさわっているようなことでもあるとしたら、それはまた先生側自身にも問題があると考えねばならぬことと思う。

先生になるときの動機がどのようなものであったとしても、ひとたび教職についたかぎりは、保育の真意を了解し、その精神に徹して責任を果たしていこうと努力するのが教育者であり、専門家としてのあるべき姿である。ところが、そうした人になろうとしないで、いつまでもでも先生として現場にあるとしたら、それは、ていのいい子守のようなもので、世間の誤解を解くどころではなく、むしろみずから幼稚園保育の真価を低下させるおそれがあるともいえよう。

もっとも、形式的なその日その日の保育課程を型のごとくに流しておれば、一応は先生としての体面を表面的にたもつことができるかもしれない。もしかすると長年その職にたずさわってきた経験者の中にも、知らず知らずのうちに馴れからくるそうした傾向におちいっている人があるかもしれないのである。

ところが現代の母親は、読書や放送・映画・報道・諸集会などを通じて教養が高められ、とくに育児や教育に関する知識は多くは断片的ではあるが、広く深いものをもつようになってきている。なかには専門家をしのぐ識見をもつ人さえ、すくなからず見かけられるのである。そうなると、幼稚園の先生もよほどしっかりとした勉強をし、専門家としてはずかしくない態度がとれるようになっていないと、好ましい保育はできにくくなるのではあるまいか。植木屋が他の人から、お前は栽培法をしらないな、といわれる場合とはわけがちがうからである。

さて、幼稚園関係の教育者がその専門家としての資格や自覚を強く要望される理由については、今までに述べてきたようなものがあるが、なおその他に別の視点からも考えねばならないものがあるといえる。それは、現今の社会情勢のきびしい動きからということである。

現今の社会風潮は、文化の長足の進歩にともない生活の合理化能率化を促進した。そして今や科学の発達、機械文明の展開が、われわれの生活様式一般を急角度に大転換させつつある。これはわれわれ人間にとって、すばらしい幸福だといえよう。けれどもそれと同時に、かがやかしい文化の巨塔の伸びていくかげに、自然への侵略という黒い暗い陰影がともなっていることも見のがすわけにはいかない。それは自然をそれだけ征服したことであり、人類としての勝利のしるしともみられるが、反面その暗い谷間のふかまりが、人類自身の危険な落とし穴ともなりつつあるのが感じられるのである。

その一例が「人間疎外」の問題である。機械化・オートメーション化は必然的に人員整理につながり、そうなると要求される人物は少数精鋭主義によるその道の優秀者、いいかえれば卓越した

スペシアリストということになる。そして特色のない人間は、結局機械の下に一様におしひしがれたままで残される運命におかれないともかぎらない。自然への圧力のはねかえりが、皮肉にも人間の上にもどってきた現象ともみられるのである。

幼稚園では、その重要性が一般にみとめられてくるにしたがい、園児はふえ、施設も強化されるようになる。すると同時に規模がしだいにマンモス化される傾向となりやすいのは、自然のいきおいであろう。そうなると、うっかりすると管理の上からの規格化機械化が強くなり、そのため幼稚園本来の性格が弱められたり、ゆがめられたりするおそれが生ずる。

また、そうなると各家庭内での種々な事情——住宅・経済・家族関係・職業などからおこる諸問題——が幼稚園保育の内部にまで強い圧力をかけてくるようになり、家庭保育と幼稚園保育との間のけじめさえ、はっきりとはつけにくいようなことにならないともかぎらない。幼稚園保育が家庭保育とも小学校教育とも区別のつけられぬ状態になったとしたならば、それは「幼稚園疎外」であり、「幼稚園喪失」ということになろう。もちろん家庭と幼稚園とが緊密な関係をもちながら、手に手をとりあって幼児の保育にあたるのは当然のことである。

しかし両者の間にはまた、おのずからの本質的ちがいがあるのを忘れてはならない。したがって現在のような幼稚園教育制度が存続するかぎり、その関係教職者は、その使命の特質をあきらかにしてスペシアリストたる自覚を堅持し、その本領の発揮につとめなければならないわけである。

では、どのような点で幼稚園の先生が専門職であることを明確にしたらよいか。それにはいろいろ細部にわたる区別も必要であろうが、いまここではきわめて常識的な輪郭をえがくにとどめよう。

その一は、家庭保育との相異点である。それは、①同時に手がける幼児が、二〇人、五〇人というような多数であること、②それがいずれも他人の子どもであること、③それら多様な子どもたちが急速な発達をしているその中途から預かり、しかもそれを限られた短期間内で成熟程度に応じて教育していかなければならないこと、④いろいろな傾向をもっている幼児たちを、広い視野の上から定められた一定方針のもとに、それに即応した教育方法を通して成果をあげるように、具体的に努めていかなければならないこと、などである。そこには単なる家庭的主観的な母性愛だけでは処理しえない多くのものが見られるのである。

その二は小学校教育との相異点である。学校教育法第十七条によれば「小学校は心身の発達に応じて初等普通教育を施すことを

目的とする」とあるのに対して、同第七十七条には、「幼稚園は幼児を保育し適当な環境を与えてその心身の発達を助長することを目的とする」となっている。幼稚園の場合に、あえて「教育」といわず「保育」と表現してある点に留意の必要がある。保育は「保護育成」の意味で「教えこむ」ことではない。「適当な環境」を与えて幼児の心身の発達を「助長」するところに主旨がある。したがって、小学校におけるりっぱな先生が、必ずしもそのまま幼稚園での最適な先生になれるとはいえないことになる。そこにも幼稚園教育者のスペシアリストたるところが考えられるのである。

ただし、専門職といい、スペシアリストというと、とかく狭い境地にとじこもって、小さく固まってしまっているもののように受けとられやすい。最近世人の注目をあびだしたカナダのマクルーハン教授の説によると、専門家は「線」のようなものであって、そのようなものは現今の文化社会では、もう必要性が認められない。なぜならば、現在の世界は電気を媒介（メディア）とした文化によって支配されている。そのためきわめて多様で開放的になっているので、一本の筋にこりかたまったようなものではなく、幅ひろく変化にみちた、ものごとを弾力的に「包みこみ」のできる、しかも内面にもつ熱情で全身的感覚的に考えたり行動したりする「点」的感覚的人間が要求されるというのである。もちろん、その「点」は固定した一点の意味ではなく「五官すべてで触れる」動的なものと解されている。

線のような専門家は、現在社会では適応性がないということは、すぐそのまま専門家が不必要だということにはならない。その点、彼の説明はあいまいであるが、点的人間をもちだしていることがおもしろいと思う。専門家はむしろ「点」のようなものであれ、と主張してでもいるように考えられるからである。

点については、表現派画家カンディンスキー芸術論を思いだす。点は最高度の簡潔さ、つまり最大限に控えめの発言であり、沈黙と発言との最高かつ唯一の結合なのである、というのである。それは力の凝集でもあるし、また力の発現の起点ともいえる。その点が、絵画・造形・音楽・舞踊などの上で、いかに重要な役割を演じているかを、彼は強調する。その点にたいする発想や内容は、マクルーハンとはひじょうにちがうのではあるが、点というものを深く掘りさげてみて、そこにきわめて近代的の意義を見いだしているところに、共通したもののあるのを興味ぶかく感ずるのである。

専門家は、単なる一連の過去経験のつみかさねの線のようなものだけであってはならないが、ただ何でも受けとめて器用にこなしていく漠然たる多才家であるというわけのものでもあるまい。

幅広い教養を身につけながら、ある点においては他の人が簡単には追従できにくいものを、地盤としてしっかりと持っている、ということが要望されるものと考えてよかろう。それは、三角形の頂点にあたるともいえる。広い底辺を基盤とし、その上にあるものをしだいにしぼりあげていった極限の頂点である。広い意味での三角形内の内容を、包みこんでの点である。しかしそれは、なにも高くそびえて人の目につく頂点のみとはかぎらない。あまり人の気のつかぬ底辺の両端にも、その点はある。その点はときに応じて起立したすがたで、その真価を発揮する。その点は、周辺の二つの「線」によって形づくられ、支えられている。なお、その三角形の内面にも無数の点が内蔵されていて、必要の折々に活用される。専門家とはそのようなものと自覚して、その衝にあたるとき、そこにおかすことのできない権威がおのずから身にそなわり、保育の真の使命を十分に発揮することができるようになるのではあるまいか。

「点的存在」としての幼稚園の先生は、幼児に接する点にまずなるべきであろう。漠然と子どもをあつかうのではなく、ひとりひとりの幼児のいろいろな点にたいし、頂点のもつ鋭敏さをもって観察し、理解し、啓発し、保護していく。その際の自分は単なる幼稚園の一教師としてのみでなく、同時に母親として、先輩として、また友だちとしてのものをも「包みこんで」のものであるべきである。しかし、そのためには家庭環境や社会環境についての広い知識はもとより、幼稚園教育要領の底辺についての理解を、十分にもっていることが前提であろう。そうした諸点を自分自身のうちに内包して、担当の幼児に接すると、自分が保育の選ばれた代表的位置にあり、その頂点となって全責任をもつものなのだ、という点意識が強くされるようになる。そうなるとおのずから、専門外の父母やその他の人々は、介入する余地を見いだすことができにくくなるだろう。そこにこそ専門家としての地位が確保されることになるのである。

もっともその点意識が、内容空疎な「ひとりよがり」では、そうもいかない。迫力のこもらない点は、いかにその点を大きくかいてみても、結局観る人々から軽視されたり無視されたりされる公算が多いからである。同じ一つの点でも、その道の書家や画家が描いたものは、力強いものがあり、活きている。それは修業の結果のあらわれである。職業なり何かの仕事に徹した、いわゆる名人とか達人とかは、なにか必ず活々とした力強い点をもっているようである。その意味で幼稚園の先生は、それなりの勉強がやはり必要だ、ということになろう。

ところで、その勉強にも「点」のあることを忘れてはなるまい。

それは採点による成績点ではなく、勉強の重点、すなわちポイントという意味のものである。才能教育研究会の鈴木鎮一氏は、今の学校教育では教はさかんでも育がたりない、と書いておられるが、幼稚園の場合にはどうであろう。保育についての重点のおき方には、いろいろ多くのものがありうるわけであるが、その中で最も中心的なポイントは「遊び」の一点であるといえよう。

オランダのヨハン・ホイジンガ教授は、その著「ホモ・ルーデンス」――遊戯人――の中で次のようなことを強調している。人間は遊びの中で発達してきたようなものだ。遊びは文化よりも古く、すでに動物の段階でみられ、文化はその遊びの中から発生し、それが「生の範疇」ともなって、いろいろな意味をわれわれ人生の歩みの上にもたらせている、というのである。これは早くも幼児の遊びが、その心身発達過程の程度に応じて、種々なかたちであらわれることからでも承認できよう。

そこで幼稚園保育課程における「点」は、幼児に何を教えるかが主問題ではなく、どのような遊びを、どのようにして遊ばせるかがポイントになるべきだ、と思うのである。幼児の生活は遊びが中心であり、遊びによって学び、遊びによって鍛えられ、遊びによって発達していくとみられるからである。

そうすれば、保育実践の場の中心はあくまでも遊びに置き「学級としてまとまった活動する時間」と「自由遊びの時間」とは、一方は「学びの場」他方は「休みの場」というような概念的区分は――形式的には置いてもよいが――考えの上からは避けて、両者は一連の遊びのリズム的変化として配列を考慮することが好ましいのではあるまいか。前者は、ある時間内幼児をグループ的場の中に置き、ある程度教師が意図的に準備した遊びの形式の中で、ある程度教師の誘導のもとに、幼児自身が遊びを遂行する。この場合、室内とか椅子・机・楽器・玩具・絵画道具・粘土道具など遊びの種類に応じての材料が利用される。後者の時間の場合は、できらく制約から解放されて、幼児自身が自由な意欲のもとにのびのびと活動する遊びの場であるが、そこでも幼児は自由行動の中で学びかつ鍛えられていく。したがって、その間も教師はたえず幼児をみまもり、その遊び方に留意して、適当な指導や保護をおこたることはできないのである。

それを休み時間と思って、先生が幼児から目をはなし放置しておくようなことがあるとしたら、保育のポイントからはずれた態度ということになろう。そうしたところにも、他者に知られぬ配慮が要求され、それらへの深い理解と実践への努力とが、専門家としての実質を身にそなえていく過程ともなるのだ、と考えられるのである。

（洗足学園短期大学）